

解放後の板東収容所俘虜たち

—日独文化交流の一側面—

依岡隆児

Kriegsgefangene im Lager Bando nach der Befreiung  
-ein Aspekt des deutsch-japanischen Kulturaustausches-

Ryuji YORIOKA

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 2433-345X

第31巻 別刷 2023年12月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*

*The Faculty of Integrated Arts and Sciences*

*Tokushima University*

Volume XXXI, December 2023

依岡 隆児

# 解放後の板東収容所俘虜たち

—日独文化交流の一側面—

依岡隆児

## Kriegsgefangene im Lager Bando nach der Befreiung -ein Aspekt des deutsch-japanischen Kulturaustausches-

Ryuji YORIOKA

### **Abstract**

Der vorliegende Beitrag hat die weitere Entwicklung der nach der Befreiung des Kriegsgefangenenlagers Bando in Japan verbliebenen Deutschen nachgezeichnet und versucht, die Entwicklung und die Grenzen des deutsch-japanischen Austausches zu verdeutlichen. Einer von der Kriegsgefangenen, K.Meißner blieb nach dem Ersten Weltkrieg in Japan und engagierte sich als Geschäftsführer einer Handelsgesellschaft und Vorsitzender eines deutsch-japanischen Austauschvereins für die Vermittlung der japanischen Kultur. Nach dem Zweiten Weltkrieg kehrte er zwar nach Deutschland zurück, ging dann aber wieder nach Japan zurück, um seine Handelsgeschäfte erneut aufzunehmen und weiterhin zum Studium der japanischen Kultur beizutragen. Dieser Artikel zeichnet nach, dass seine Aktivitäten im Kulturaustausch mit Japan durch seine Erfahrungen im Kriegsgefangenenlager Bando ausgelöst wurden, zeigt aber vielleicht auch die Grenzen seiner Aktivitäten durch das Bild eines Deutschen auf, der gezwungen war, in einem sich militarisierenden Japan

den Trends der Zeit zu folgen.

はじめに

板東俘虜収容所研究では、富田弘の『板東俘虜収容所―日独戦争と在日ドイツ俘虜―』（法政大学出版局、1991年）を機に、本格的な研究が相次ぎ、俘虜たちが残した収容所新聞である„Die Baracke“の翻訳刊行や文献資料の研究が行われてきた。最初期の模範収容所としての板東収容所の総合的研究から基礎的資料の翻訳刊行の第二期を経て、『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』の研究誌刊行やその他の収容所関連の文献の整理・集成を行うようになった。板東俘虜収容所研究は松江所長の功績や第九初演の顕彰を中心に、収容所内の新聞の翻訳という基礎研究や俘虜たちに関する個別研究が着々と遂行されている。一方で、ドイツ人の日本関連資料などはいまだ十分に研究されていない。現在では、解放後の元俘虜たちに着目して、こうした彼らが残した日本関連の文献資料の記述を調査研究する新しい段階にきている。

この第三期の板東収容所研究では、したがって、これまでの研究では見過ごされがちだったドイツ人と日本との関係を可視化することによって、板東「神話」として日本側から偏向した形で紹介され、ともすれば美化され虚構化されてきた交流の実態を明らかにしていく必要があると考える。未整理の文献の基礎研究を行いつつドイツ人の残した日本関連資料調査によってドイツ人側の視点を取り入れた双方向的な研究を行うことで、日独文化交流を歴史的に把握していく必要がある。ところが、収容所解放後に日本に残った元俘虜たちの中には日本文化を研究し、日本文学を翻訳紹介していた者たちがいたことはあまり知られていないし、日独文化交流に関わっていた彼らの活動の実態や彼らが残した資料文献についても、いまだ十分に調査されていない。本稿はこうした俘虜たちの日本関連資料を調査研究し、板東収容所体験を機に彼らドイツ人が日本紹介や日本研究を始め、それが両国の文化交流に関わっていくという実相を明らかにしていくものである。

なかでも、松山と板東の収容所で日本語通訳（日語通）として活躍し、収容所解放後も日本に残り日独交流活動をしたクルト・マイスナーや同じく日本に残り日本研究に従事し多くのドイツ語翻訳を出したヘルマン・ポーナー、板東を再訪、文化交流を築いたヨハンネス・バート、さらにはポーランド人で板東に収容されていて戦後も日本に残ったタデウス・ヘルトレについては、その足

跡をたどり研究を深めていきたい。たしかに、ポーターについては大阪外国語大学で回顧展が開催され、ヘルトレについても一般向け単行本が義理の娘の立場で書かれているが、彼らの全体像を明らかにする学術調査はいまだ不十分である。特にマイスナーについては何本かの論文があり伝記的紹介がなされたとはいえ、彼の収容所解放後の日独文化交流活動や講演・執筆活動、多岐にわたる翻訳活動はあまり知られていない。それらの調査からは、彼が板東俘虜収容所での経験から日本により深く関心を持ち、日独交流に関わるようになったことと、軍国主義時代における文化交流の可能性と限界を明示できるだろう。そこで、本稿はこのマイスナーの日本関連文献を調査することで、板東俘虜収容所がもたらした日独交流の一側面を明らかにすることを目的とする。

### 1. クルト・マイスナー

板東収容所の俘虜のいく人かは戦後も日本に残り、日独文化交流に貢献した。そんなドイツ人の一人、クルト・マイスナー (Kurt Meißner, 1885–1976) は、後にドイツ東洋文化研究協会 (OAG) 会長を務め、日本文化の紹介も積極的に行った。二十歳で来日して商社に務め、第一次世界大戦で青島戦に従軍して俘虜となり、四国の松山、板東の収容所に入れられ、解放後はまた商社に戻り、仕事のかたわら日独交流にも尽力している。第二次世界大戦後帰国していたが、1953年に再来日し、再び会社経営に従事した。晩年になって1964年にハンブルクに戻り、別荘のあるロカルノで亡くなっている<sup>1</sup>。『日本のドイツ人』『横浜のドイツ人』『七夕』などの著書がある。

マイスナーについての日本における先行研究では、前述の富田弘の著作のほか、佐藤仁平、中里信一の論文があり、一般向けの単行本としては、才神時雄、棟田博、林啓介、秋月達郎らの本がある<sup>2</sup>。佐藤論文は、マイスナーに逸早く着

<sup>1</sup> 拙論「クルト・マイスナーの『四国奇談実説 古狸合戦』—その背景と意義—ドイツとの関係から」（『徳島大学総合科学部言語文化研究』、Vol. 18、2010年）でのマイスナーの死去についての記述をここに訂正して、「1976年にロカルノで死去」とする。

<sup>2</sup> 中里信一「板東人、クルト・マイスナー覚書」愛知学院大教養部紀要 54 (4)、2007年。佐藤仁平「日本の紹介者クルト・マイスナー」『慶応大学経済学部日吉論文集』(34)、1984年。才神時雄『松山収容所 俘虜と日本人』中公新書、1969年。棟田博『桜とアザミ—板東俘虜収容所』光人社、1974年。C. バーディック、U. メースナー、林啓介『板東ドイツ人捕虜物語』海鳴社、1982年。秋月達郎『奇蹟の村の奇蹟の響き』PHP 研究所、2006年。また、マイスナーが四国放送の「板東俘虜収容所」（1971年）というテレビ番

目した先駆的研究で、略歴と著書目録と解説を付けているし、中里はマイスナーの登場する文献を広範に渡って調査しよく整理しているが、いずれもマイスナーの収容所解放後のことを中心に論じるものではない。また他にはマイスナーの日本語文法書など個別の著作についての論もあるが、これらも同様にマイスナーの収容所から解放された後のことを十分に明らかにしているわけではない。そこで以下、佐藤・中里論文を踏まえうえて、マイスナーの著作ならびにその関連資料を参照しながら、彼の収容所解放後の足跡をたどってみよう。

マイスナーは、回想録によると<sup>3</sup>、ハンブルクの出版業者の子として生まれた。祖父のオットー・マイスナーは、カール・マルクスは『資本論』を自分の出版社から刊行していた<sup>4</sup>。クルトの父オットーが出版社を継ぎ、さらに兄のオットーが後を継いだ。

1902年、母方の祖父プファイファーの口利きでシモン・エバース商会の見習いとなった。シモン・エバース商会は、マイスナーを日本に派遣したが、そのときには、創設者の一人・ユーリウス・シモン（ジーモン）はとうに亡くなっていて、アウグスト・エバース（エーファース）はその直前に亡くなった。レイボルド商館はシモン・エバース商館の資本で二年半前に設立された会社（「エル・レイボルド商館」）だったが、1907年にその社主Ludwig Leyboldが亡くなったため、クルトが東京に転勤、22歳でこのレイボルド商館の二代目社長に

---

組ではハンブルクの自宅にいるのが映っている。マイスナーはそこでは書斎の中と、妻ハンニーとともにベンチに座っている日本庭園で、ドイツ語で回想している。鳴門市ドイツ館『Ruhe』2010年3月号にそのときのマイスナーの写真が載っている。

<sup>3</sup> マイスナーは回想録『日本での六十年』（Kurt und Hannie Meißner: Sechzig Jahre in Japan. Lebenserinnerungen von Kurt und Hanni Meißner. Hamburg 1973. (2. Aufl. Hamburg 2007) 以下、KMと略し、その頁を数字で表す）で日本での仕事や生活、板東収容所時代のことを書き残している。これは、回想録ではあるが、第一世界大戦後、ドイツに一時帰国した際に結婚し日本に連れてきた妻ハンニーとの共著という形で、私家版として出されている。

<sup>4</sup> 拙論「日独文化交流試論—四国から見た『世界』」（『徳島大学総合科学部言語文化研究』Vol. 13、2005年）では「ハンブルクの出版業者オットー・マイスナーの次男」としているが、これは父「オットー」のことで、祖父でマルクスの『資本論』を刊行した「オットー」のことではない。中里は、関連文献ではこれを『資本論』を出した方のオットーの「子」としたり、その学歴を「ハンブルク大学卒」としたりと、誤認・誤記が多いとしている（中里、前掲書）。

なっている<sup>5</sup>。

横浜の牧師ハンス・ハースと出会い、親交を結んでいる。ハースはそのとき、弱冠 21 歳だった。彼のアドバイス「この国と人々に興味を持ち、そして打ち込める道楽をいくつかもつべきだ」を、マイスナーは忠実に守ったという（中里、前掲書）。後にハースがライプチヒ大学の比較宗教学教授になったとき、マイスナーは彼を訪問している。マイスナーは当時から OAG と福音協会地区の会員になっていた。

日本語は横浜で会社の同僚から習った。「おはよう」は Ohio、「はやく」は Eierkuchen、「アトオシ」は Anton schieb、「ありがとう」は Alligator といった調子で、日本語を覚えたという（同書）。

OAG では レーマン (Rud. Lehmann) 会長と親しくなり、若くしてそこで「寄席」の講演をさせてもらっている。協会は当時、神田・今川小路にあった。1912 年の OAG でのマイスナーの寄席の講演は、OAG が印刷し、神戸クロニクルが英訳し、ドイツではシュミーデル著の『日本のドイツ人』に収録されている。「寄席」は、後に 1963 年に OAG の 90 周年記念号でマイスナーが再び取り上げていて、1912 年時点の自分の講演と比較しながら、寄席が上演減になったことなどを述べている<sup>6</sup>。

板東収容所から解放されてから、マイスナーは東京に戻り、1920 年にシュタインフェルトやファリアンらとともに、第一次世界大戦で一時業務停止していたレイボルド商館の事業を再開した。マイスナーの手腕のおかげで会社は発展し、彼自身かなりの資産家になる。1929 年には同商館は株式会社となり、マイスナーとシュタインフェルトは取締役となった。この「ハインツ・シュタインフェルト」は戦前シモン・エバース商会の神戸支社にいたが、マイスナーとは

---

<sup>5</sup> これらの社名については、拙論（2005 年）では「シモン・ヴェルト機工商会」、拙論（2010 年）では「ジューモン・エーファース機工商会」としていたが、ここでは日本で慣用の呼び方を使って、本稿で「シモン・エバース商会」とする。設立者はユリウス・ジューモンとアウグスト・エーファースの二人で、その二人の名前を商会名にしているのが、本来なら、シモン&エバース商会と書くべきか？彼は Leybold レイボルド商館社長となるが、この社名も、慣用に従い、拙論の表記を改め、ここでは「レイボルド」とする。参考、社史「レイボルド 100 年の歩み」

[https://www.leybold-kk.com/dcms\\_media/other/100years.pdf](https://www.leybold-kk.com/dcms_media/other/100years.pdf) 2023. 11. 20. 閲覧

<sup>6</sup> Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens. Bd. XLIV Teil 2 Jubiläumsband 1873-1963, 1963, S. 35.

収容所ではずっと同室で、戦後も一緒に仕事をしている。後にアメリカに渡り、ニューヨークのトランスオーシャンコマース社の社長となった<sup>7</sup>。マイスナーはまた、OAG 会長を長く務めている<sup>8</sup>。解放後、ドイツに一時帰国していたときにハンニーと知り合い結婚、日本に連れてきた。

マイスナーは祖父プファイファーの影響で反ユダヤ主義に染まることはなかったし、OAG 会長という立場で、ヒトラーの反ユダヤ主義には危惧を感じていたという (KM, 184)。ただ、1930 年代半ばには OAG 自体が「強制的同一化」を強いられ、NSDAP の国外大管区の地域支部に飲み込まれ、ナチに入党する会員が相次いだ。そんななかユダヤ系の会員は役職を解かれ、協会から締め出されたという<sup>9</sup>。マイスナーが個人的な思いとは別に、会長という立場で、これらの動きに関わらずにいられたとは考えにくい。

彼の日本文化への関心にも、この時代の思想的影響が見られる。マイスナーの『日本のドイツ人』には、大森のドイツ人学校で日本式弓術を日本人の先生がドイツ人の青年に教えている写真が載っている。弓術は騎士的技術であって、単なる身体的運動ではないとして、伝統と「禅」哲学との関連があり、日本人には神聖なものとなっていると述べている<sup>10</sup>。当時、ドイツ人ヘリゲルが書いた『弓と禅』がブームとなっていて、軍国主義下における日独で文化的な面でのつながりを強調するのに一役買っていたことの影響を受けていたようだ。

また、「日本における国民教育の基礎」(Grundlage der nationalen Erziehung in Japan. Tokyo (OAG) 1934.) という 1934 年ベルリンの独日協会での講演では、ヒトラーの言葉を引用して、日本とドイツとの類似点を指摘し、日本人論を展開し、日本の家族的天皇制を称えているばかりか、「ハイル・ヒトラー！」と論を結んでいる。また、朝日新聞 (1937 年 12 月 6 日夕刊 P2) には「日本刀で表徴する独逸魂の共鳴 応召社員に示す親善」という記事が日本刀をかざし

<sup>7</sup> 「レイボルド 100 年の歩み」、前掲書、8 頁。

<sup>8</sup> マイスナーの OAG 会長期間は、マイスナーの『日本のドイツ人』(Kurt Meißner, Deutsche in Japan. 1639-1939. Dreihundert Jahre Arbeit für Wirtsland und Vaterland. Stuttgart, Berlin 1940) では、「1921-22」ならびに「1932-」、OAG ホームページでは、「1932-1945」となっている。

<https://oag.jp/about/vorstand-beirat/ehemalige-vorsitzende-der-oag/> 2023. 11. 30. 閲覧

<sup>9</sup> 日独交流史編集委員会編『日独交流 150 年の軌跡』雄松堂書店、2013 年、177 頁

<sup>10</sup> Meißner, 1940, a. a. O., S. 96-97.

たマイスナーの写真とともに掲載されている。さらに、1940年に刊行された『日本のドイツ人』では、佐藤が指摘するように、ナチス迎合的な記述があったのを、戦後改版した際には削除している<sup>11</sup>。板東収容所出のジークフリート・ベルリーナーとの関係についても、最近の研究では、経済学者で博士号を持ち、東京帝国大学で教えていた彼は、ドイツがナチス政権になってから、OAG会長であるマイスナーによってOAGから追い出されたとされている<sup>12</sup>。たしかにマイスナーはOAG会長という立場上、時局に対して迎合的な姿勢を見せざるをえなかっただろうが、一方で戦時中にも日本の現代文学の独訳集（Der Tanzfächer: und andere kleine Geschichte. (Privatdruck) 1943）を出していたように、彼の関心は政治にはなく、むしろ日本の文化・文学の方であったといえるだろう。

この点については、マイスナーと「従妹のエーディト」の関係が参考になる。後に外務大臣となる東郷茂徳と、「従妹エーディト」Edith (1887–1967) は再婚していた。彼女は旧姓 Editha Giesecke で、マイスナーとはマグデブルクの

---

<sup>11</sup> 佐藤（前掲書）によると、「旧版 Deutsche in Japan (1939) と新版 (1961) とを較べてみるならば、前者が第二次大戦勃発ごろ出版されたため、当時のナチス政権の意を迎え、英国などに対して反発するところがあるのに対して、後者ではその部分は削られている。また前者の巻末にあった貴重な資料、たとえば OAG の歴代会長名やその任期についての記録、また重久篤太郎氏の手になる明治時代のお雇い独逸人のリスト等は後者にはついていない。総じて新版になって新資料を加えて書き換えた部分は見られない」とされる。ちなみに、この本には神戸ドイツ人学校の授業風景を写した写真が掲載されているが、その教室の後ろにはヒトラーの肖像が飾られているが (Meißner, 1940, S. 96–97.)、新版では削除されている。また、この旧版の付録には「日本の戦争俘虜収容所で亡くなったドイツ人」のリストがある (ebd., S. 137f.)。また佐藤論文では、マイスナーのエドワード・シュネルの翻訳について触れている (“General” Eduard Schnell, Monumenta Japonica Tokyo 1941. A. R. Weber の Kontorrock und Konslatsmütze (“フロックと山高”または“二足のわらじ”) のマイスナーによる復刊)。

<sup>12</sup> Spang, Christian W., Die Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG) zwischen den Weltkriegen. In: Thomas Pekar (Hrsg.), Flucht und Rettung Exil im japanischen Herrschaftsbereich (1933–1945). Berlin (Metropol) 2011, S. 85f. なお、同書では友人だったシュタインフェルトも、ユダヤ系であったため、入会していた OAG で「切られた」というその妻の言を紹介しているが、その時の会長がマイスナーだったのである (ebd., S. 82)。

郵便局長だった曾祖父 Johann Friedrich Meißner を同じくする「はとこ」の間柄だった。彼女は父母とともに神戸に来ていたが、父が亡くなり、母が当地でペンションを経営していた。エーディトは実の子ではなく、ドイツ人貴族に誘惑され、自殺した母の姉の娘だった。エーディトは神戸で建築家ゲオルク・デ・ラランデと知り合い、後に結婚している。デ・ラランデが亡くなって後、東郷と再婚し、「エヂ」と改名している。二人の間には娘いせがいるが、この東郷いせの著書『色無花火』（六興出版、1991年）には「ドイツの伯父」「ドイツの伯母」として、「クルット・マイスナー」夫妻が出てくる（24頁）。東郷家が東京で借家にいたところに、暑い夏を母といせは「ドイツの伯父」の別荘で過ごしている。マイスナーについては「寄席が大好きで、日本語はもちろんべらべら。会社から帰ってくると近くの寄席に出かけるのを楽しみにしていた」（26頁）と回想している。

またマイスナーは、ナチ党员だったとも言われているが<sup>13</sup>、戦後、マイスナーはGHQによる東郷の素行調査で証言、東郷の弁護をしている時に、自分のことについては、「ナチス党に地位を持ったことはありません」と、日本語での自筆調書において述べている<sup>14</sup>。

戦争が終わると、マイスナーの会社はアメリカ進駐軍によって解体される。1948年にドイツへ強制送還されたが、1953年に日本に戻ってくる。レイボルド商館は特殊会社に解体されていたが、マイスナーは自ら設立に関与し、1952年に事業再開した機工貿易株式会社に入り、社長に就任している。1954年に機工貿易会社は「レイボルド」の全株を買収し、レイボルド機工株式会社と社名を改めた<sup>15</sup>。1955年にはハンブルク大学から名誉哲学博士号を授与される。1964年、離日、「レイボルド」社長を辞任し、跡を継いだ息子のハンスが三代目社長となった。ドイツに戻ってからはハンブルクおよびロカルノの別邸に住む。1976年8月13日、別荘のあったロカルノにて死去。最期までレイボルド社の会長だったという<sup>16</sup>。

---

<sup>13</sup> Spang は、マイスナーが1936年にはナチス党に入っていたという息子のハンスのインタビューでの言を紹介している (Spang, a. a. O., S. 75)。

<sup>14</sup> 「法廷証第3622号 宣誓供述書」「弁護側文書第2752号 宣誓供述書」（国立国会図書館デジタルアーカイブ）

<sup>15</sup> 「レイボルド100年の歩み」、前掲書、11頁

<sup>16</sup> 佐藤、前掲書、参照

## 2、解放後のマイスナーと板東俘虜収容所との関連

本章では、俘虜収容所からの解放後のマイスナーによる板東についての言説を紹介していく。板東俘虜収容所を彼がどのように見ていたか、そして板東俘虜収容所体験が日本への関心を強め、その後の彼の日独文化交流活動の展開にいかにつながっていったかを明らかにできるだろう。

マイスナーは収容所で日本語通訳だったのに、回想録では、収容所時代の記述が少ない。四国の印象もあまり述べてられていない。その代わり、この回想録における板東時代の回想箇所では、才神時雄『松山収容所』の一節のドイツ語訳を載せている。才神はマイスナーに松山と板東の収容所時代について、彼の帰国直前にインタビューしていたのだ。才神の本のマイスナーの翻訳部分は118頁から176頁の箇所で、原文をかなり縮めた抄訳である。才神の本で「Y・バート」（119頁）や「Y・ダート」（173頁）となっているところを、マイスナーの訳では「Joh. Barth」と直している。

一方、マイスナーの言で俘虜収容所のことが述べられている箇所では、松山収容所の前川所長は野心家で口やかまし屋だと述べている。それに対して板東収容所の松江所長は、寛大で、ビールを飲むことを許し、「私たちは5人の精神障害者より100人の酔っ払いの方がいい」と語ったとする。1917年に松山から板東に移った彼は、ここでは収容所を保養所のようにすることができたと述べているが、これも所長の松江大佐の寛大さのおかげであったとする。収容所での余暇を有効に使い、やりすぎて暇がなくなっただけだったとも言う。地元との交流では、ドイツ人料理人が日本の婦人にジャガイモ料理を教え、俘虜の中の学者（；ベルリーナーのこと）が経済の講演会を開き、二人の園芸家が日本人の農夫にトマト栽培を伝授しているときには、マイスナーは通訳として立ち会っていた（拙論2010年）。

その他、板東時代の部分は少ないとはいえ、この回想録には板東収容所を出た後の時代の箇所でも、あちこちで板東のことが言及されている。妻のハンニーは、夫のクルトが戦争俘虜で会計担当者として働いていた時に、徳島では糞尿1トンで35セントが支払われたと語っていたとして、収容所には1000人の俘虜がいたから、これはちょっとした収入だった（KM, 127）と述べている。ここからマイスナーが板東では会計担当であったことと、地元で糞尿の取引をしていたことがわかる。

また、俘虜仲間のことも回想されている。解放後も日本に残ったドイツ人たちの間には交流があったことが知れる。マイスナーはまた、収容所でたくさんのことを、学術的なものを含めて学んだとして、解放後には新聞や本を読むこ

とができるようになっていたと述べていて (KM, 105)、解放後の日本での生活や交流活動に、収容所での出会いとともに知識や体験が生かされていたことを明らかにしている。

才神の本にはシュタインフェルトとともに写る「日語通」の写真が掲載されているが、これは松山での第二回目のドイツ人俘虜受領員たちに同行を命じられていた時の写真 (146 頁) である。マイスナーの回想録にも同じ写真が掲載されている<sup>17</sup>。

板東の思い出として、「キンカンジャム」の発明のことが触れられている。俘虜たちは板東で獲れるキンカン (Goldpomeranze = Kinkan) で Heldenschmiere キンカンジャムを発明したというが、それを今では東京で妻のハンニーが「私」のために作ってくれているというのだ (KM, 149)。

解放後に出版したマイスナーの本や翻訳本にも板東収容所の痕跡がとどめられている。松山の通りで色とりどりの紙で飾った竹竿を家の前に出しているのを見て、板東に移ってから、『バラック』にそのことを書いている。そればかりか、もっと知りたいと思ったマイスナーはさらに研究し、後に父の出版社から『七夕』の本を出すことになる<sup>18</sup>。この本の刊行からは、マイスナーの松山への愛着もうかがえる。

『四国奇談実説 古狸合戦』の翻訳 (Kurt Meißner (übersetzt), *Seltene Geschichte aus Shikoku. Der Krieg der alten Dachse. Eine wahrheitsgetreue Überlieferung. Mündlich vorgetragen von Kanda Hakuryu, einem berufsmässigen Erzähler von Helden- und dergl. Geschichten.* Tokyo 1932.) は、出版は教文館 (東京・銀座) と Verlag Asia Major G.m.b.H. (Leipzig) で、日本とドイツの出版社から日本関係のドイツ人に向けて出されたものである。特に OAG 会長に就任した際の記念という意味で刊行したと、本人

<sup>17</sup> また回想録 96-97 頁のマイスナーが立つドイツ橋の写真は、いつの写真だろうか。帰国前か? 1960 年に高橋春枝によるドイツ人墓地の清掃活動が知られるようになってから、その年 11 月にハース大使一行が板東を訪れ、さらに 65 年には日本に残っていたパートが夫人とともに板東を訪問、さらに 70 年には大阪万博を機にライポルトとクローリーが同じくやってきたが、マイスナーも、この写真によれば、板東を再訪していたことになる。しかも彼は 1964 年にはドイツに帰国しているので、それはライポルトらが来る前である。マイスナーはいち早く板東再訪を果たしていたことが推測される。

<sup>18</sup> Kurt Meißner, *Das Tanabatafest. Die Mythe, das Fest und die Geschichte über Tanabata in alten japanischen Authologien.* Hamburg (Otto Meißner Verlag) 1923.

は述べている。「訳者の前書き」には、「私がなぜこの物語をこうして翻訳したのかと、と皆さんは疑問に思われるだろう。それに私はお答えする。これは大きな島である四国で最も知られた民間伝承だからだと。あるいは、それが典型的な日本の英雄物語だからだと。しかしそう言ったのでは、まだ言い足りない。本当の理由とはこうである、私は日本の狸とその物語、そう、この日本のユーモアの最も美しい産物、を愛するからだ。後に、四国という島で戦争捕虜として5年間過ごさなくてはならなかったとき、私は付き添いの巡査と一緒に作業をした農民たちからたくさんの狸物語を聞いた。収容所のすぐ近くには、つい最近まで一匹の古狸が松の巨木の下に巣を作っていたのだ」とある。

これと関連して、妻のハンニーも、「東京の狸」はどこにいるのかと言って訪ねてきた知人のことを回想している。むろん、その「狸」がハンニー本人のことを指しているとは知っていたことである。マイスナーがこの四国の狸の本に妻への献辞として、「Fechdachs（：ずうずうしい狸、「ずうずうしい人」という意）である我が愛する妻」と書いていたためである。回想録付録の『東アジアルトンシャウ』（1936年2月1日）記事「商人で学者のマイスナーとヴィルヘルム・グンデルト」では、マイスナーの自然愛が『古狸合戦』になったのだとされているが、これはむしろマイスナーの狸に代表される日本文化への愛着と、平和への希求が込められていたと言うべきだろう。マイスナーは上記のように狸が懐かしい板東の思い出であるとともに狸が腹鼓を打つのは平和でないときないと、この翻訳書で述べていたからだ<sup>19</sup>。

ちなみに、長井亜歴山（アレクサンダー）はマイスナーの『古狸合戦』を徳島県立図書館に寄贈している。その内表紙には、ドイツ語と日本語（おそらくマイスナー直筆）で謹呈の言葉が書かれている。「昭和37年3月」として、「徳島県のたくさんの美しい、古い思い出とともに」という言葉が添えられている。徳島への良き思い出がたくさんあったがゆえに、こうして徳島の話の翻訳を徳島ゆかりの長井亜歴山に託して地元の図書館に寄贈したことが想像される<sup>20</sup>。奥付には「昭和7年6月15日」、「著者兼発行者」として「クル

<sup>19</sup> 拙論（2010年）、参照

<sup>20</sup> ここからは、マイスナーと長井亜歴山（アレクサンダー）とは交友関係があったことが知れる。徳島との縁もこういう形で続いていたのである。この長井家とマイスナーとの関係については、マイスナーの回想録では、OAGの式典でパートナーの婦人を選べたが、その時の女性がエルザ・ナガイだったことが述べられている。とても見栄えがする少女で、H. Nagai 博士（長井長義のこと。徳島出身でドイツ留学した薬学者。「H. Nagai」

ト・マイスナー」と書かれている。

日本語への関心も、収容所解放後も続いていた。収容所時代に口語日本語教科書を収容所内で印刷していたが、文語日本語の文法書の方は解放後に出版されている。収容所時代の日本語教育についての関心が、その後も継続していたことがわかる<sup>21</sup>。

マイスナーは晩年にドイツに帰り、板東をしのぶ元俘虜たちの会（バンドー会）をハンブルクに立ち上げた。毎月ハンブルクで集まっている。第3海兵隊の古い仲間たちに会っていたが、そうした折には、62か月間の長い収容所暮らしになった日々を回想していたのである。

ちなみに、谷光次鳴門市長はマイスナーをハンブルクの自宅に訪問していて、「ハンブルクのアルスター湖畔のマイスナーさんのお家の応接間には、ワンワン風が飾ってありました」と、マイスナーの家に鳴門名物のワンワン風があったと述べ、そこには狸の置物もあったとも言っている<sup>22</sup>。また、徳島から来た林啓介も、マイスナーを今度はロカルノの別荘「七夕荘」の方に訪問している。バンドー会のことを尋ねると、マイスナーは「毎年何回か、ハンブルクの私の家や市内のレストランに集まって、夫人同伴のバンドーを偲ぶ会を賑やかに開いていたのですが、二、三年前から急に参加者が少なくなりました」と答えている<sup>23</sup>。1973年のことで、マイスナーは88歳、亡くなる3年前のときだった。

おわりに

以上、本稿では板東俘虜収容所解放後に日本に残ったドイツ人のその後を追跡し、日独交流の展開と限界を明らかにしようとしてきた。その一人であるク

---

は「N. Nagai」の誤記か）の娘だった。兄のアレクサンダーは外交官で、後に特許法律家になったとされている（KM, 36）。

<sup>21</sup> 『日本語日常語教科書』（板東収容所印刷所 1918 OAG. 教文館 オットー・ハラツソヴィッツ、ヴィースバーデン）があるが、これは、『日本語日常語教科書』第一部、松山（1916）と『日本語日常語教科書』第二部、松山（1916）の再版である（中里、前掲書）。文語文法書とは、Kurt Meißner, Lehrbuch der Grammatik der japanischen Schriftsprache. In: Die Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens im Buchhandel 1927. のことである

<sup>22</sup> 棟田、前掲書、146頁

<sup>23</sup> バーディック、メースナー、林、前掲書、211頁。林啓介『「第九」の里ドイツ村「板東俘虜収容所」』（改訂版）井上書房、1993年、180頁、参照。

ルト・マイスナーは、第一次世界大戦後に日本に残り、商社の社長をしながら、軍国主義下の日本で日独交流協会の会長を務め、日本文化の紹介を展開してきた。第二次世界大戦後に強制退去させられ、いったんドイツに帰っていたが、再び日本にやってきて、商社事業を再開、日本文化研究にも引き続き貢献した。本稿ではこのマイスナーの著作や関連文献を元に、その日本への関心の広がりや日本との文化交流活動が板東収容所体験をきっかけにしていたことを跡付けたが、あわせて軍国主義化する日本において時流に従わざるをえなくなっていったドイツ人の姿を通して、その活動の限界も明らかにすることができたのではないだろうか。

とはいえ、今回は、マイスナーの文献を網羅的に扱うことができなかつたし、収容所からの解放後も日本に残った元俘虜たちについても、十分に扱うことができなかつた。今後はマイスナーの戦後にまで及ぶ著作・記事・論文についても調査し、他の元俘虜たちの調査を進めながら、日独文化交流の一相をさらに解明していきたい。